

---

# Wing

Fill

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Wing

### 【Nコード】

N8542D

### 【作者名】

Filll

### 【あらすじ】

動物園で働くことになった渡部伝助は、とても珍しい動物の世話をすることになった。けれど、それはとても美しい翼を生やした少女だった。

## 翼を持つもの（前書き）

思いついたらすぐ書くタイプなんです。だから、今回も思いついたことババツと書かせていただきました。

## 翼を持つもの

Wing 翼を持つもの

今日、僕はおじさんの働く動物園で一緒に働きに行く。とても大きい動物園で、世界一広い動物園らしい。珍しい動物もいるので、ストレスを与えないように世話をしないといけないらしい。でも、僕が飼育するのはどんな動物なのかまだ聞かされていない。哺乳類だろうか？それとも爬虫類？魚類かもしれないな。

「ようこそ、伝助。待ってたよ。」

おじさんが動物園の入り口で手を振っている。

「おはよう、おじさん。」

僕はおじさんのところまで駆けていった。

「君に今日から働いてもらうんだが、ちゃんと朝飯食べてきたか？」

「大丈夫だよ。ご飯4杯も食べてきたから。」

「そうか。それなら大丈夫だな。ハハハッ。」

おじさんは笑って僕の肩を叩いた。

「動物は餌を与えないとすぐ死んでしまう。だから、決まった時間にきちんと餌を与えないとだめだ。分かったな？・・・あと、檻の掃除は徹底的にやるんだ。」

おじさんが歩きながら説明を始めた。

「この動物園で働くからには、禁酒、禁煙、時間厳守は絶対守るんだぞ。おい！その清掃員！さぼるなよ！！あと煙草を吸うなど何回言ったら・・・。」

おじさんは清掃員に注意しながら歩いている。

「で、何の話だったかな？・・・そうだ。伝助に飼育してもらった動物は本当に珍しい動物なんだ。そして、とても美しく、鮮や

かな翼と尾を持つてる。だから、手入れを忘れずに毎日しろよ。ああ、ちょうど着いたな。」

おじさんに連れられて着いた目の前には、大きな鳥籠があった。つまり、鳥類の飼育をするのだろうか？

「あれ？おじさん、この鳥籠、何もいないけど？」

「ああ、今は動物園の裏のビルにいるんだ。ちょうど伝助の後ろに見えるだろ？あの高いビルだよ。行ってみようか。」

そう言うとおじさんは、ビルに向かって歩きだした。

中に入ると、動物の独特の臭いがした。

「臭いだろ？まあ、慣れるまでの辛抱だ。ハハハッ。」

おじさんはまた笑って奥へ進み、エレベーターを起動させた。

エレベーターで着いた階の奥には縦に伸びた円柱の水槽があった。中に変な色の液体と・・・なんだろう？ 何かが入っている。

「この液体には身体を治療してくれる効果があるんだ。・・・この子は、発見されてすぐにあの動物園に引き取られたんだ。美しい翼があるのが売りなんだが、なかなか翼を広げなくてねえ。だからお客から小石やゴミを投げられて傷ついているんだ。そのせいで、翼に血がついて固まって広げられなくなってるんだ。・・・ああ、そうだ。名前を言ってなかったね。この子の名前はレイズ。自分からそう言っていた。」

自分から？オウムかインコ？それとも九官鳥だろうか？

「水槽の正面から見た方がいいだろう。こっちへ来なさい。」

おじさんに言われて、僕は正面から水槽を見た。

「これ！・・・人間じゃないか！！」

白い服を身に纏った女の子が僕の目の前の水槽の中にいた。けれど、おじさんの言った通り、翼と尾が生えていた。女の子は目を瞑っている。僕の見えないように。

「翼の生えてる人間なんて聞いたことないが？・・・まあ、鳥人

とでも言っておこうか。治療が終わるまで伝助はここで椅子にでも座って見ているといい。」

おじさんが椅子を持ってきてくれた。僕は椅子に腰掛け、じっと水槽の中の女の子をみていた。

僕は、あれから何時間ここに座っていたんだろう？ 朝の10時からここに来て、もう日が紅く染まっている。

じつと、この子を見ていて気付いたことがある。この子、悲しそうな顔をしている気がする。……ここから出たいんじゃないだろうか。僕にはそう思えて堪らない。

「……………」

女の子は、ずっと目を瞑ったままだ。液体の中じゃ目を開けられないのかな？

にしても、この子、本当に悲しそうだ。少し出してあげようかな。……えっと……このスイッチを押せばいいのかな？

ピッ

プシュウウ……

伝助が右端のスイッチを押すと、中の液体がみるみる抜けていった。

「んじゃ、次はこのスイッチかな？」

ピッ

ピーピーピー……

カシユン……

伝助は右から二番目のスイッチを押した。と同時にアラーム音が鳴り響き、水槽のハッチが開き、女の子が倒れて出てきた。意識を失っているらしい。僕は、跪いて女の子を抱き寄せて息を確認した。液体の中に入っていたのに、ちゃんと呼吸をしている。不思議だ……。

「伝助!!!何やっているんだ!!!」

おじさんがすごい剣幕で警備員と一緒に部屋に入ってきた。おじさんのこんな恐い顔は初めてだ。

「その子から速やかに離れなさい。」

僕は、警備員の睨みつけてくる視線が恐くかった。警備員がこっちに向かつてくる。僕は、跪きながら後ろに下がった。女の子を抱き寄せていることも忘れて・・・。

「君、さっさとこっち来なさい！」

警備員はどんどん近づいてくる。その分、僕もどんどん後ろに下がった。

「伝助！それ以上下がったら・・・！！」

ドンッ

ガシヤアアアア・・・ン

あれ？

伝助は、勢いよく下がりすぎて窓ガラスを割ってしまった。

やばい！！落ちる！！ここから落ちたらどんだけ痛いだろう？その前に死ぬか・・・。

伝助の頭の中はだんだん真っ白になってきた。

「・・・・・・・・・・」

落ちていのに女の子は一向に目を覚まさない。

どンドン落ちていく。あと少しで地面に叩きつけられそうだ。

パチ・・・

メキッ！！メキメキメキッ・・・ バサッ！！！！

地面に叩きつけられる直前だった。女の子が目を開け、翼を広げた。それは、それは、心うたれるくらい美しい翼だった。

T o b e c o n t i n u e d

## 小さな住人たち

Wing 小さな住人たち

「ん．．．んん．．．．．？」

伝助が目を覚ますとそこには生い茂る木々たちが集まる森の中だった。

「ここは．．．どこ？」

伝助がキョロキョロと辺りを見渡すと、翼の手入れをしている女の子の姿があった。

「えと、あの．．．レイズだっけ？名前．．．。」

伝助はレイズの方を見て聞いた。

ギラツ

レイズはいきなり振り返り、伝助を睨みつけた。とても不機嫌そうだった。

「なんで、あんたがその名前知ってるのよ。なのに、こっちはあんたの名前知らないのよ。不道理だと思わない？」

レイズは足をパタパタさせて、すごくイライラしている。

「え？あ、ごめん。えと、僕の名前は渡部 伝助って言います。」

伝助は慌てて自己紹介をした。

「伝助．．．．．なんかいまいちピンとこない名前ね。」

レイズの機嫌はまだ直っていない。

「ところで、ここは？」

伝助が質問した。

「ここは、あなたの地球界からとおーーーーーく離れてる世界。って言っても、超空間で繋がってるけど．．．。」

「よく分かんないんだけど．．．。」

伝助が首を振っている。



「つまり、あなたのいたとこじゃなくて、別世界なのよ！そして、この世界は私の生まれた世界で、私の育った世界。」

伝助はまだ分からないようだ。

「……って言われても、風景もあんまり変わらないし……」

「あんな地球界と一緒にしないでくれる？！あそこは空気だつて汚れて、呼吸するだけで一苦労だったんだから！おまけにあんな薄汚れた檻に入れられるなんて……！」

レイズはどんどん不機嫌になっていく。

「まあ、分かったから……それで、帰り道はどっち？」

伝助は話しを聞くのに疲れてしまった。

「この森をまっすぐいったところの滝の裏側に地球界に繋がる道があるわ。50キロほど歩くことになるけど。」

レイズが腕を組みながら言う。

「50キロも?!」

「そう、50キロ。じゃ、私は私の家に帰るから、ここでお別れね。」

レイズが背を向けて歩きだした。

「ちよつと、待つてよ。僕一人で帰るの？送ってくれないの？」

伝助がレイズを止めた。

「私は、地球界に近づくななんて二度とごめんだわ。それに、帰りたいのはあなたなんでしょ！帰って何するかは知らないけど、帰りたい理由があるんでしょ！」

レイズは怒鳴り散らした。

「別に……帰りたい理由はないけど……。」

「じゃあ、私に付いてきてよ。今からあの村で荷造りするんだから、手伝いなさい。」

レイズが示した方向には小さく建物がちらほら見えた。

「行くわよ。」

レイズが歩きだした。

「行ってくつて決めてないんだけど……歩いて行くのか？翼があるんだから飛べばいいのに。」

伝助もしょうがなく歩きだした。

「村の付近じゃ飛べないのよ。魔物や戦争が起こったとき兵士が上から攻めてこないように特殊なシールドをはっているの。今は戦争してないけど。」

「魔物がいるのか？」

「いるわよ。特に森にはたくさん。今だって、あなたの後ろにいるかもね。」

そう言われて伝助は辺りをキョロキョロと見渡した。

村に着いた。しかし、様子がおかしい。建物が少し小さくできている。

「どうやら、小人族の村ね。でも、食料や旅の準備はできるかも。」

「小人って本当にいたんだ……。そういえば、旅って？」

小人の存在に驚きながらも、伝助は質問した。

「ここは、シエルアータ国の南西のスマラっていう村だから、東のずっと向こうの首都、セシディアが私の故郷なの。そこまで帰るための旅よ。だから、食料や武器、薬も準備しなきゃ……。手始めに、この白い、ヒラヒラした服をどうにかしなきゃね。」

そう言つとレイズはお店らしき建物に入つていった。

「やっぱり、旅をするのだからそれなりの格好をしなくちゃ。あ、あとあなたの服、結構な値段で売れたわ。地球界の布が珍しかったのね。」

服装の変わったレイズは上機嫌で店から出てきた。

「なんかゲームにでてきそうな服装だ。」

伝助が自分の格好を見た。

「ほら、これ。食料とか旅に必要なものが入ってるから。ああ、それから、はい。あんたの武器は剣でいいでしょ。私は銃ね。」

伝助にレイズは大きなリュックと幅が20センチはある大きな剣を渡した。

「なんで、武器がいるの？」

「さつきも言ったでしょ。魔物がいるって。武器持っていないと急所狙われてお陀仏なんだから。」

伝助に悪寒が走った。

「お前たち、セシディアに向かうのか？」

一人の小人が話しかけてきた。

「ええ、そうよ。」

レイズが答えた。

「にしても、お前、鳥人族なのにくちばしがないんだな。」

小人が不思議そうな顔でレイズを見ている。

「そんなことを言うために話しかけたの？」

レイズに少し苛立ちが見える。

「ああ、そうだった。セシディアに向かう道なら大きな氷で塞がれてるよ。」

「なんですって?!その氷って溶かすことできないの?」

「普通の火じゃ溶けないんだ。けど、いい方法ならある。」

「それってどんな方法？」

レイズがすかさず聞いた。

「魔女に頼むのさ。」

小人は腕を組んで言う。

「魔女?・・・でも8年前に魔女狩りがあって滅びたんじゃ・・・?」

「逃げてきた双子の魔女がその角を曲がった芸者小屋にいるから会ってみるといいよ。」

小人は指差して居場所を教えてくれた。

「……行ってみる価値はありそうね。」

「ありがとうな、坊主。」

伝助が小人にお礼を言つて、芸者小屋の方に向かっていった。

「……もう30歳なんだけど。」

小人は少し困った顔をした。

T o b e c o n t i n u e d

## 双子の魔法使い

Wing 双子の魔法使い

カンツ カンツ

芸者小屋の前に黒髪で長い、ポニーテールの子が薪割りをしてい  
る。

「月華、また踊りの稽古さぼったでしょ。」

芸者小屋から金髪でショートヘアの子が出てきて言った。

「あたしは、芸者なんてならないの。日華だけなればいいじゃない。  
い。」

カンツ カンツ

黒髪の子はまた薪を割り始めた。

「うちより月華の方が上手いのに……。それに、月華がやめる  
ならうちもやめる。」

「あんたはやりなさいよ。姉の命令なんだからね！」

「双子なんだから姉とか関係ないと思うけど……。」

「……………」

「お姉さんたちも怒ってるし、やっぱり稽古休んじやだめだよ。」

「血も繋がってないし、あたしより背の低い義姉さんでしょ。そ  
んなの怒っても恐くないわ。」

黒髪の子は不機嫌になった。

「あ……………」

そこへ、伝助とレイズがやってきた。

「なんでしよう？」

金髪の子が伝助に駆け寄った。

「見慣れない顔だな。」

黒髪の子が腕を組んだ。まだ不機嫌なようだ。

「月華、目上の人に失礼よ！」

「……………」

黒髪の子はますます不機嫌になっていく。

「ここに魔女がいるって聞いたんだけど？」

レイズが聞いた。

「つたく！あのおしゃべりめ、また話しやがったな！」

「月華！口を慎みなさいよ。ああ、うちたちのことです。うち

の名前は日華、14歳です。よろしくおねがいます。」

「他人に名前言ってもいいのかよ。」

「いいじゃない。この人たちいい人そうだし。月華もちゃんと自

己紹介しなさい。」

「月華だ。同じく14歳。よろしく。」

月華は冷たく接した。

「私はレイズ、18歳。よろしくね。」

レイズは機嫌がいいようだ。

「伝助です。レイズと同じで18歳。よろしく。」

伝助も荷物を置いて自己紹介をした。

「それで、どうしてうちたちのところへ？」

日華が首をかしげている。

「セシディアに行きたいんだけど道が大きな氷で塞がれてるらし

いの。」

「それをうちの魔法で溶かせばいいんですね。任せてください。」

「

日華はやる気満々だ。

「んじゃ、あたしは寝とくわ。」

月華が小さく手を振った。

ムンズツ

「月華も行くの。黒魔術使えるの月華だけなんだから。」

日華は月華の後ろの襟を掴み、ズルズルとひこずって芸者小屋に入っていた。

「月華、早く準備してよ。」

日華が首を長くして待っている。

「……よし、描けた。日華、今行くから焦らすな。」

月華が走って日華のところへ行った。

カチャッ

月華と日華が芸者小屋から出てきた。

「それじゃ、出発ー！ー！」

レイズに言われてみんなはスマラの村を旅立った。

T o b e c o n t i n u e d

## 双子の約束

Wing 双子の約束

「それじゃあ、伝助はこの世界の常識も分からないのか？」

山道を歩きながら月華は伝助に質問した。レイズと日華は歩くペースが早く、姿が豆粒くらいの大きさにしか見えないほど距離が開いている。それでも、月華と伝助は急ごうとせず、自分のペースで歩いている。

「この国、シエルアータって言うんだっけ？」

伝助は荷物を少し月華に持ってもらいながら山道を進む。

「そつ。ここはシエルアータ国。王国だ。っていつでも王なんて見たことないけど……。」

「どうして？」

「王の話しよりこの国のことを簡単に説明しないと……この国の人口の七割は獣人族で二割は小人族、残りの一割が普通の人間、つまりあんたみたいなやつ。んで、獣人族の四割が鳥人族。大きな翼と尾と鋭いくちばしを持つてる。その鳥人族がこの国の政治とか法を定めてる。ここまでは話し分かる？」

「なんとなくは……。」

「じゃ、話し進めるけど、王もその鳥人族から決められる。今の王は匿名で、仮面を付けてて顔も分からない。」

「それって本当に王様？」

「この国じゃ当たり前なのよ。王が仮面被るなんて。あたしは認めたくないけど……。とにかく、その王がこの国を支配してる。あたしは王を憎んでる。」

月華は足を止め、俯いて歯を食いしばった。

「魔女狩りされたから？……レイズが言った。」



「……………そつ。王が命じたの。魔女を殺せつて……。8年前だから、あたしと日華は6歳だった。あたしたちは、遠くまでおつかいに行くように父上と母上に言われた。遠すぎるから日華は駄々をこねてた。そしたら、父上が日華の頬を叩いた。だから、日華は泣きながらあたしとおつかいに言った。

「あと少しでお家に着くから、ちゃんと歩かなきゃ。」  
あたしは、転んで座り込んでる日華に手を差し伸べた。

「もう歩けないもん。足が痛いんだもん〜！」  
日華の足は泥だらけで血も出た。

「じゃあ、おんぶしてあげるから、これ持つてて。」

あたしは、おつかいで買った荷物に入った風呂敷を日華に渡しておんぶしてあげた。あたしの家には下駄しかなかったから二人とも下駄で、あたしの足も草に切られてボロボロだった。

「……………月華、焦げ臭くない？」

最初に気付いたのは日華だった。

「……………そう言われれば……………ん？あれ！！煙が上ってる！あたしたちのお家からだ！！！」

あたしは日華をおんぶしているのも忘れて必死に家に駆け寄った。

「……………家が……………」

あたしたちの着いた頃には家は崩れかけ、原型を留めていなかった。

「父上、母上はどこ?!」

「たぶん、お家の中……………」

「じゃあ、助けに行かなきゃ!!」

日華が炎の渦巻いてる家の中に入ろうとした。

「待つて!!」

ガッ

あたしは日華の腕を掴み、入ろうとする日華を力ずくで止めた。

「もう、助からないよ。火事が起こる前から死んでるから・・・。」

「なんで？なんで分かるの?!」

「微妙に油の臭いがするし、犯人の残した血の跡が足跡と共に残ってるから・・・。」

「なら、この足跡を追おうよ！そしたら、犯人が見つかるじゃない!」

「だめだよ。きっと途中で消されてるし、父上と母上を殺した相手だ。あたしたちも見つかったら確実に殺される。」

「じゃあ、どうすればいいのよ!」

日華はパニックになってしゃがみ込んだ。

「生きよう・・・日華。この前行った小人の村があるだろ？あそこなら匿ってくれる。それに、あの芸者小屋は裏では情報屋をしてるらしいから、父上と母上を殺した犯人のことが分かるかもしれない。ね、行こう。ここに居たらいけない。生きなきゃ。日華はあたしが必ず守るから・・・ぜったいに。」

あたしは日華の震えている身体を抱き寄せて、落ち着かせた。

たぶん、父上も母上も魔女狩りのこと知っておつかいに行かせたのね。・・・あたしは、あのスマラの村を出るのは本当はいや。日華を危険な目に合わせるかもしれない。でも、約束したんだ。ぜったいに守り抜くって。」

月華はギュッと手を握った。

「・・・。」

伝助は悲しそうな表情を浮かべている。

「お二人さーん！氷で道が塞がってるって、見つけたのー！早く来て頂戴!」

レイズが口に手を当てて叫んだ。

「分かったー!」

伝助も叫んだ。

「この氷なんだけど、溶かせる？」

レイズが氷をコンコンツと叩いた。

「これぐらいのなら・・・。みんな、ちょっと下がって。」

月華の指示通り、みんな下がった。

「ファイア!!」

月華は杖に念じ、唱えた。すると、火が現れ、みるみると氷を溶かしていった。

「これで通れるわ！」

レイズが言った。

「じゃあ、あたしたちはこれで帰らせてもら・・・。」

「きやあつ!!」

いきなり大きな魔物が現れて、日華を攫っていった。

「日華!!」

月華たちは後を追い掛けた。

T o b e c o n t i n u e d

## 魔物の洞窟

Wing 魔物の洞窟

「日華、すぐに助けるから。」

険しい山道を月華、レイズ、伝助は進んでいく。

「本当にこつちであつてるの？見失っちゃったし、道もないし・・・」

レイズが先頭を進んでる月華に訊いた。

「間違えてない。」

月華は自信があるようだ。

「なんでそんなこと分かるのよ？」

レイズは反抗的な態度だ。

「教えてくれるから。」

「誰が？」

「日華が。」

「・・・」

レイズの反抗的な態度が一転して大人しくなった。

「あたしと日華は以心伝心してる。だから、どんなに離れていても、どんな状況でも心の中で会話できるんだ。」

月華は草木を掻き分けてどんどん進んでいく。

「どうやらあの洞窟が魔物の住処らしい。たぶんあのぐらいのでかさなら魔術を使える魔物だろう。あたしだけで行くから、ついてくるなよ。」

月華は一人でさつさと洞窟へ入っていった。

「可愛くない子ね。ほっときましょう！氷は解けたんだし、私たちも先を急がないと・・・」

レイズはそう言い、伝助を連れて洞窟から離れていった。

「魔女 ヲ 食ベレバ 魔力 ガ 増エル」

魔物はそう言い、日華を足のつま先から丸飲みしようとした。

「サンダー!!!」

「!!!」

日華を掴んでいる魔物の腕に雷が落ちた。

「日華を守りに来た。さつさと日華を放せ。」

魔術を唱えたのは駆けつけた月華だった。

「ウルサイ!!! 魔女 ヲ 食ベテ 強ク ナルンダ!!!」

「ぷっ!!!あはははっ!!!」

冷静だった月華が突然腹を抱えて笑い出した。

「何 ガ オカシイ?!」

魔物が問いただす。

「だってそんなの無理なもの!!!ぷははっ!!!」

「何故 ダ?」

また魔物が問いただした。

「だって日華は魔女じゃないもの!!!くくっ・・・」

月華が必死に笑いを堪え始めた。

「魔女 ジャ ナイ??」

「白魔術はたしかに使えるけど魔女じゃないよ!だって、男の子だもの!!!あははははは!!!」

「!!! 嘘 ダ!!!」

「あたしとこじゃ子供の頃に男が女の格好するのは当たり前!それに女の方が何かと都合がいいんだよ!そのおかげで芸者小屋にも入れたしね!そうだろ、日華?」

「まあね・・・」

日華は男とばれて顔が少し赤くなっている。

「あゝあ、笑えた!んじゃ、余計なことはこれくらいにして日華を返してもらわなきゃ。」

「ホール!!」  
ガラツ・・・

魔物が叫ぶと、月華の足元のすぐそばに、深い穴ができた。とうより、もはや崖である。足を滑らせると落ちて、死んでしまうだろう。

「やっかいな魔術を使う奴だな・・・。」

月華の額に一筋の汗が垂れた。

「ホール!!」

魔物がまた叫んだ。

シュツ ガラツ・・・

月華は華麗に左へ避けた。

「もう見切った。おまえの魔術なんて簡単に避けられるわ。」

「ホール!!」

シュツ ガラツ・・・

魔物と月華は魔術をしては避け、魔術をしては避けを繰り返していった。

「もうおまえの魔力は限界のはず・・・それに、おまえの魔術のおかげで穴だらけのフィールドになった。あたしは穴と穴との間を通れるがでかいおまえには通れない。つまり、おまえの方がこのフィールドじゃ不利だ。」

月華は足の動きを止めた。

「ウツ・・・ド!!」

魔物が最後の力を振り絞り、叫んだ。すると、木の蔓つるが現れ、月華に絡まり、身体からだの自由を奪った。

「くそ!そんな魔術覚えてたのか!」

どんなに足掻いても身動き一つできない。

「オマエ 八 魔女 力? 女 力? 食ベル ト 強ク ナル 力?」

ズズズシという足音を響かせながら、魔物が月華に近寄ってくる。  
バンツ！！

「！！！」

魔物の背中に銃弾が当たった。

「助太刀に来たわよ！私は嫌だったけど。」

レイズがキリツとした顔立ちで魔物に銃口を向けている。

ザシュツ・・・

「日華、大丈夫か？」

伝助が日華を掴んでいた左腕を剣で切り落とした。

「はい、大丈夫です。それより、月華を。」

シュツ シュツ

伝助は、月華に絡まっていた蔓を切った。

「レイズ、両方助けたから退散だ・・・！！！」

バンツバンツバンツバンツ

伝助がレイズの方を見ると、何発も撃たれ、魔物は弱っていた。

「これで終わりだ・・・。」

レイズはそう言うと、魔物の頭に押し当てた銃の引き金を引いた。

バアアア・・・ンツ

魔物はピクリとも動かなくなった。

「殺すことはないだろ?!」

伝助が怒った。

「生かしていれば、また被害が出るだけよ。」

レイズはそう言い残し、さっさと洞窟から出て行った。

「助けてくれてありがとうございます!」

洞窟の出口で日華が伝助とレイズにペコリとお辞儀した。

「・・・ありがとうございます。」

月華もお礼を言った。

「・・・あのさ、日華と話し合ったんだけど、助けて

もらったお礼にセシディアまで送ってやるよ。恩はちゃんと返さないとな。」

月華は照れくさそうに言った。

「セシディアの街の中に入ってしまっただらうちらは魔女なので捕まってしまう。だから、街の近くまでなら……。また氷などの障害物ならうちらがいればどくれるし……。」

「たしかに、まだ障害があるかもしれないし……。いいわ。ついて来たいならついてきなさい。」

「旅の仲間が多い方がいいしね。」

月華と日華の考えにレイズも伝助も賛成のようだ。

「ああ、そうでした。もし、怪我などをしたらうちに言ってください。うちは白魔術師ですから。」

日華が優しく言った。

「じゃ、行くわよ!!」

レイズたちは洞窟を離れ、セシディアを目指して歩き始めた。

T o b e c o n t i n u e d



## 牢獄の獅子

Wing 牢獄の獅子

「また道が塞がってるわ。」  
コンコンッ

どうやら今度は氷ではなく、硬い鋼で塞がっているらしい。

「あたしの魔術で鋼を壊すものはないな……。」

月華が悩んでいる。

「ここの近くにランベルという海に浮かぶ町があったはずですが、そこで爆薬を買ってくるという案はどうでしょう？」

日華が言った。

「しょうがない、その案しかないわね。」

月華たちは一旦セシディアへの道から離れ、海岸の船着場へ向かった。

「ランベルの町は海で囲まれてる。それ故に、罪人を閉じ込める刑務所に丁度良いの。だから島の半分は刑務所の所有地。はっきり言ってこの町も罪人の面会に訪れる人のために作られたといっても過言じゃないわ。」

レイズが船から下りて説明した。

「刑務所があるなら爆薬を販売してないんじゃないのか？そんなのあったら脱獄に使われるだろ？」

伝助が首を傾げた。

「確かに、伝助が言っとおり脱獄に使われてしまう。だから、販売は行っていない……。表はね。裏だと普通に行ってるわ。悪は悪に惹かれる……。つまり罪人の近くには別の罪人が寄ってくる。」

るってこと。

さあ、こんなとこでばさつとしてないで、私と日華は食材集め、伝助と月華は爆薬探しよ。鳥人族には爆薬うつてくれないし、爆薬って意外と重いから男手が必要でしょうから。」

レイズが仕切った。

「なんで鳥人族には売ってもらえないんだ？」

伝助が訊いた。

「鳥人族はまともなことに使わない。人を殺めることにしか使わない。兵器としか爆薬を使わないってことだ。」

月華が言い捨てた。

「月華！そんなこと言ったらレイズに失礼でしょ！！ごめんなさい、レイズさん。ほら、月華も謝って！」

日華が怒った。

「伝助、さつさと行くぞ。」

日華の言うことはお構いなしに、月華は町の中に去っていった。

「月華、どこ行くんだ？」

伝助が尋ねた。

「刑務所だよ。囚人に爆薬の売人訊くのが一番手っ取り早い。口を割らなきゃ魔術で強引に訊くまでさ。」

月華たちは町のはずれの丘の刑務所へ向かった。

金網に囲まれた敷地内には多くの囚人がいた。

「こんなに囚人がいるとは・・・異様だな。」

月華は顔に手をつけ、悩んでいる。

そこへ、一人の囚人が近寄ってきた。

「お願いだ。俺をここから出してほしい！！」

月華へ必死に頼みかけている。

「獅子族か・・・なら、こんな金網も簡単に壊せるだろ？」

月華が囚人の身形を見た。20歳くらいだろうか。

「この金網には強力な電気が流れてる。触れただけでお陀仏だ！それに、あんた魔女だろ？」

「何故、魔女だと？」

月華が問う。

「獅子族の勘は鋭いんだぜ。」

囚人は得意そうに笑う。

「あたしが魔女だとしても、おまえを脱獄させたところであたしに何か得はあるのか？」

「セシディアに行きたくないか？俺ならそこへ続く道の鋼の壁を壊せる。旅人にとつちや爆薬を買う金は大金だ。俺ならただだぜ。どうだ、得になるだろ？」

囚人は鼻で笑った。

「何故、セシディアに向かっているのが分かった？」

月華は疑いの眼差しを囚人に向けた。

「だから、獅子族は勘が鋭いつて言っただろ。」

「まあいいが、脱獄させたところで逃げはしないだろうな？」

「獅子族が嘘をつけば死を意味する。だから約束は守るさ。」

囚人は言い放った。

「あたしは月華、こっちは伝助。おまえは？」

「セツ。獅子族のセツだ。」

「なら、セツ……これで交渉成立だ！サンダー！！！」

月華はいきなりそう唱えると、金網に雷を落とした。電気を流していた機会はショートし、壊れてしまった。

バリッ！！

セツは金網を破り、脱獄に成功した。

「さっさと逃げないとまた捕まっちゃう。とりあえず、船着場までダッシュだ！」

セツと月華と伝助はその場を後にした。

レイズたちと合流した月華たちは、急いでランベルの島を出た。  
バアリンツ！！

「ほら、約束通り、鋼の壁を壊したぜ。」  
セツが誇らしげに言う。

「獅子族ってやっぱり馬鹿力だわ……。」  
レイズの口から小言がこぼれた。

「ありがとう、セツ。」  
「ありがとうございます。セツさん。」  
伝助と日華はお礼を言った。

「俺もセシディアに向かうはずだったんだが、警察に捕まっちゃ  
って……。」

セツは苦笑いで明るく見せようとしている。

「なら、あたしたちと一緒にセシディアに行かないか？」  
月華が自然な顔つきで誘った。

「……金もないし、そうすっか。それじゃ、さっさと行こう  
ぜ……。」

セツが、元気に走っていった。

「ちよつと待ちなさいよ！」

レイズたちはセツを追いかけて走っていった。  
こうして、セツが仲間に加わった。

T o b e c o n t i n u e d

## 羽の使い道

Wing 羽の使い道

ピピッ

レイズからアラーム音のような音が聞こえた。

「レイズ、何の音？」

伝助が訊いた。

「ただの時計のアラームよ。計画的にセシディアに向かうためにセツトしておいたの。」

そう言っつて、レイズは左手の袖を捲り、みんなに腕時計を見せた。

「……………」

セツが腕時計をじっと眺めた。

「レイズ、話があるんだが……………」

夜になり、みんなが寝静まった頃にセツが言った。

「ちよつと場所を変えて話さない？みんな起きちゃうわ。」

レイズはセツの真剣な眼差しに気付いたのか分からないがそう言っつた。

二人は、遠く離れた岩の裏側に足を運んだ。武器などは一切持たずに。

「俺は鳥人族をはつきり言っつて信じていない。近頃じゃ他の種族は鳥人族の奴隷のように働かされてる。セシディアに抗議に行く途中に鳥人族と擦れ違いにぶつかっただけで俺は刑務所行き。この前までは王がいなくてとても平和だったのに、今じゃまるで王が帰っつてきたみたいになつた種族の格差が激しい。」

セツが強い口調で話した。

「それと私に何か関係がある？」

レイズは自分は関係ないという態度を示した。

「さっきの腕時計は本当は通信機じゃないのか？それで城内と通信してる。」

「何のために？」

レイズはまた反抗的な態度だ。

「理由は二つ。一つはおまえが王だから。もう一つは伝助たちを捕まえるため。地球界の人間だから城の科学部隊に預けて実験体にもするんだろ。月華と日華は唯一の生き残りの魔術師。いろんなことに使って、使えなければ処分にもすればいいってたぶんおまえは考えてる。違うか？」

セツの表情が少し恐々しい。

ペリ・・・

レイズがいきなり自分の翼の羽を一枚むしり取った。

「・・・ねえ、知ってる？鳥人族の翼の羽って普通の鳥より丈夫なの。むしり取ったから分かるだろうけど、先端って長細くってそれに、鋭いの。だから・・・」

ザシユツ

「武器としても使えるのよ。分かった？」

セツの左胸に羽が突き刺さり、レイズはもつと奥へ喰い込ませるようにグリグリと羽をねじっている。

「細かいけど、さすがに心臓に穴を開けられたら立ってられないでしょう？肺に穴を開けた方が確実に死んでたかしら？まあいいわ、どっちみちあなたはこんな何もないところに放っておかれて死ぬんだから。」

「ガフツ！」

ポタポタポタッ！！

セツの口から血が零れた。

「さて、日が昇る前に汚れた手をなんとかしなきゃ。こんな下衆な臭いが残ったら、獅子族もろともただじゃおかないわ。」

レイズはそういい残し、伝助たちのところへ戻っていった。セツは意識が遠のく中、レイズの後姿をただただ見ることしかできなかった。

「セツは？」

月華が物音に気付いて目を覚ました。目をこすり合わせている

「ああ、やっぱり自分の住んでた獅子族の村に帰ることにしたんだって。別れを言うのが辛いから、みんなが寝てる間に行っちゃった。」

レイズが微笑みながら言う。

「……そう……。」

月華はまた横になり、眠り始めた。

T o b e c o n t i n u e d

## 仮面の王の帰還

Wing 仮面の王の帰還

「見て、セシディアよ！」

レイズが指差した方向にかすかに街並みが見える。

「……………」

月華は眉間にしわを寄せている。

「……………やっぱりセツがいなくなったのに疑問が残る。獅子族はやると決めたことは絶対にやり通す種族だ。セツはセシディアに行くと言い切ってたから途中で帰るはずがない。心配だから探してくる。」

月華は背中を向けて来た道を帰ろうとした。

「そうはいかないわ。」

ザッ

レイズの合図で、一瞬にして鳥人族の兵士たちに伝助たちは囲まれてしまった。どうやら近くの岩などに隠れていたらしい。

「レイズ、どういうことだ?!」

伝助が訊いた。

「こうゆうことだ。」

ササッ

一人の兵士がレイズに何かを手渡した。

カチャッ

それは仮面だった。とても鋭いくちばしのついた仮面。レイズはそれを被った。

まるで魔界の恐ろしい魔女のようだ。

「くちばしの大きさ、鋭さ、形の良さで鳥人族は身分を決める。

しかし、数百年に一度、突然変異かは知らぬが、くちばしのない王



が生まれてしまう。しかし、それが民衆にばれてしまえば王は殺され、国は滅びる……。」

「だから、仮面でお顔を隠しているのですか?!」

レイズに日華が質問した。

「さよう。おや、こんなところで長話をしていたら、日が暮れてしまう。さつさと捕らえよ!そして牢屋に閉じ込めておけ!」

レイズの指示通り、兵士たちが伝助たちを捕まえた。

「ここから出してくれ!」

伝助の声は空しくも牢屋に響くだけだった。手足を縛られ、身動きもできない。月華と日華の杖は鉄格子の向こうの監視員のテーブルの上に置いてある。監視員は一人、そのテーブルに向かって椅子に腰掛けている。

コツコツコツ……

誰かの足音がこちらに向かってくる。レイズだ。騎士のような人を二人連れている。

「明日の朝、魔術師を処刑する。首吊りとギロチンどちらが好みかな?」

レイズが嫌味つたらしい口調で言う。

「地球界の人間も明日の朝には科学部隊に預けるとしよう。」

「お願いだ!ここから出してくれ!僕ら仲間だろ?!」  
伝助が必死に頼んだ。

「……仲間だと?そんなもの私には必要ない。私は友情や愛情などという感情はとっくの昔に殺したのだよ。あってもただ邪魔なだけだからね。それに、私がそちら側に寝返ってみんながハッピーエンドになる物語など、平凡すぎて誰も願ってないさ。」

ああ、あとこれから地球界に我が兵を送り、滅ぼしてやる。丁度南西へ風が吹いている。その風に乗ればすぐにスマラの村につける。まるで天も私に味方してくれているようだ。そして滝の裏側の

扉から地球界へ忍び込むのだ。」

レイズは奇妙な笑みを浮かべた。

「そんなことさせるか!!」

「身動きできない人間が何を言っても無駄だ。指をしゃぶってそこで見ておれ。」

レイズがそう言つて伝助たちの目の前から去つていった。

「やはり、もう……。」

レイズが小部屋で誰かと話している。見知らぬ男だ。連れていた騎士たちはおらず、二人きりだ。

「今はまだ大丈夫ですが、3、4年もつかどうか……。」

「最悪だな。地球界に行つてこの有り様。しかも狙いのものは手に入らなかつた。今、兵隊たちを地球界に手配させたが、見つかるだろうか……。」

レイズはガラス張りの箱に手をかざした。中に何か入っているが暗くてよく見えない。

「残念です、王様……。」

男はそう言い、部屋から出ていった。

牢屋の窓から外を見るともう夜だった。

ガリガリガリ……

何かを削る音がする。

「あれ？月華、さっきまで左側にいたのに、いつの間にか右側に来てないか？それに髪がほどけてないか？」

伝助が不自然なところに気付いた。月華の髪型はいつものポニーテールではなく、髪を下ろした状態だった。

「ああ、ちょっと思いついたんだけど……もし、ここから出られたら地球界に逃げようと思うんだ。まだ兵隊も着いていないだろ

うし。」

伝助の質問に答えず、月華はいきなり変なことを言い出した。監視員は寝ていて、伝助たちの会話は聞こえていない。

「地球界に逃げてても兵隊たちが地球界まで追ってきたら意味ないでしょ！」

日華の考えは確かに正論だ。

「地球界に逃げてからあたしの魔術で扉を塞げば兵隊たちは来れない。」

「けれど、ここから出られないし、スマラまでは何週間も掛かるのよ！！歩いてきたから知ってるでしょ？」

日華はまた正論を唱えた。

「……一度だけあたしは父上の書庫に勝手に入って怒られたことがあった。怒られてたから日華も知ってると思うけど、そのときに手にした書物に魔法陣を用いる魔術が書いてあった。結界や強力な魔術がほとんどだったけど、その中にワープの魔術があった。つまり、瞬間移動類の魔術。そのワープという魔術は魔法陣から別の魔法陣に瞬間移動するもの。旅に出かける前、あたしはその魔法陣をスマラの村にちゃんと書いて残してきた。そして、今この場でも魔法陣を描き上げた。」

伝助が月華の後ろを見ると、縛られているにも関わらず、右手は紅いクリスタルを持ち、魔法陣らしきものを床に削って描いていた。紅いクリスタルは髪を留めていたものだ。

「月華、ちゃんとここから逃げる方法考えてたんだ！すごい！」

日華がはしゃいでいる。

「……でも、杖がなければ魔術は発動しない」

月華の顔が暗くなった。

「大丈夫だよ！きつと何とかなるよ！」

日華が励ました。

「そうだね……。そうだ。これを日華にあげよう。あたしは髪飾りとして使っていたけど、きつとペンダントにもなるはず。」

月華はそう言って、牛革の紐で吊るしてある紅いクリスタルを日華に授けた。

「これ、母上からもらったものでしょう？うちがもらっていいの？」

日華は返そうとした。

「あたしがいなくなってもきつとそのクリスタルが守ってくれる。だから、大事に持っておいて。」

月華は日華のクリスタルを握った手を優しく掌で包んだ。

「何か、杖を取り返せる方法はないかな？」

伝助たちは一刻と迫る処刑への時間を無駄にしないように必死に考えた。

T o b e c o n t i n u e d

足掻いても足掻いても守れないもの(前書き)

今回で最終話になります。

足掻いても足掻いても守れないもの

Wing 足掻いても足掻いても守れないもの

「この鉄格子が外れてくれれば取りにいけるのに……。」「  
日華は鉄格子越しに杖を眺めていた。

ビービービービー

「??？」

城の全体に警告音が鳴っている。

【城の外部からの侵入者が確認されました！】

放送がなり、寝ていた監視員も起きた。

カツカツカツカツ

兵隊が駆けてきて、監視員と何か話している。話しを聞くと、監視員は慌てて走っていった。監視員の代わりに兵隊が残った。

「……何が起きたんだ？」

伝助は恐る恐る兵隊に状況を訊いた。

「侵入者が入ったらしいぜ！」

兵隊は聞き覚えのある声だった。

カチャツ

「セツ!!」

兵隊が兜を取るとセツだった。

「よかった!! てつきりレイズに殺されたのかと……。」

月華は心配していたらしい。

「傷は負ったが大丈夫だ。監視員はたぶんすぐ帰ってくるはずだ。

さっさと逃げないとない！」

バキッ!!

セツは鉄格子を拳で壊した。そしてみんなの縛られた手足を解放した。

「セツもみんなも魔術で脱出するから魔法陣の上に乗れ！」  
パシッ

月華はそう言い、監視員のテーブルの月華と日華の杖を奪い返した。そして自分も魔法陣の上に乗った。

「ワープ!!!」

トンッ

そう唱えて月華は魔法陣に杖を突いた。

コツコツコツ・・・

監視員が帰ってきた。

「なんてことだ?!」

監視員が鉄格子の中を覗くと既に誰一人居なかった。

ビービービービー

「王様、牢の中の奴らに逃げられてしまいました。」

監視員は慌てて王の元へ行き報告した。

「なんといいことを！すぐにスマラへ向かっている兵士にそのことを伝える!!!」

「はい、直ちに。」

王の周りに居た騎士の一人がそう言い、王の前から去っていった。

「そしてこの監視員を即刻処刑にしろ！」

「王様!!!待ってください！私には妻もまだ幼い子もおります！どうか!!!どうか!!!」

「そうか・・・なら家族の目の前でギロチン刑にしてやるう。家族の前で死ねてうれしかろう。」

「王様!!!お願いです！王様・・・!!!」

監視員の叫び声は王の耳に入らず、監視員は兵隊たちに連行されていった。

「ここ・・・は・・・スマラ?」

どうやらワープの魔術は成功したようだ。

「よかった！助かった！！」

伝助たちは喜んだ。

「あ！そういえばセツさんは傷を負ったんですね。うちの魔術で治しますよ。」

ケアル！！」

日華が魔術を唱えると、セツの顔色がだんだん良くなってきた。胸の羽を突き刺された跡も残っていない。

「すっげえ……あんがとよ、日華。」

ワシャワシャ

セツは日華の頭を撫でたというより、髪をボサボサにした。

「……ん？あれはなんだろう？」

伝助が遠くの空を眺めると黒い点が無数にあった。

「兵隊だ！もうこんなところまで！早く地球界へ逃げないと！！」  
月華がそう言って走り出そうとしていた。

「……僕はここに残る。」

伝助がいきなり言った。

「え……何言ってる……」

「やっぱりレイズを信じたい。だから話し合ってみる……」

「そんなことしても意味無いに決まってる！！伝助も一緒に逃げないと！！」

月華が必死に連れて行くこうとしている。

「……気が済むようにすればいいんじゃない？」

セツが言った。

「気が済むまで話し合って気が済んだら俺たちのところへ戻って来い。でも、無理はすんな。危ないと思ったらすぐに逃げろ……いいいな？」

セツが顔をあげるとニッコリ笑っていた。ちょっと引きつっているようにも見える。

「うん、分かった。」

伝助はうなずいた。



「じゃあ約束な。」

コンッ

セツは伝助の拳と自分の拳を軽くぶつけた。

「じゃあ、あたしたちはもう行くから・・・またね。」

月華は顔を隠しながら言い、背を向けた。

ギユッ

「今までありがとうございます。御武運を祈ってます。」

日華は伝助の左手を両手で握り締めた。

別れを告げると、月華たちは森の中へ入っていった。みるみると

伝助の姿が小さくなって、最後には見えなくなった。

伝助と離れて何時間経つただろうか。始めは走っていたみんなも今では歩くことさえままならない。

「・・・あ。」

日華の背筋がいきなりピンと伸びた。何かに気付いたようだ。

「水の音がする!!」

日華が走っていった。

「日華、待って!!」

月華とセツは追いかけた。

ザーーーーーッ

日華の言うとおりに、勢いよく水が流れる川があった。とてもきれいな水だ。魚まで居る。

「あつちに滝がある!きつとあそこが地球界への入り口です!!」

日華が指を前に突き出しながら再び走った。月華とセツは疲れて

日華を追うのが精一杯だ。

「滝の裏側だよ。」

日華は恐る恐る滝の裏側のへ足を伸ばした。滝に足を取られたら溜まりも無く流されてしまうだろう。

なんとか裏側へ行くと、空洞の中を見渡した。

「見て！地球界への扉が見える！！」  
滝の裏側へ行くと、枠の中に生い茂る木々が見えた。きっとそれが地球界への扉だ。

「よかった……これで……助かる……。」

月華とセツが滝の裏側に着き、一息ついた。

次の瞬間だった……。

ドシユツ

「！！！」

月華が後ろを振り返るとセツの懐に鋭く、太い槍のような矢が突き刺さっていた。兵隊たちがもう追いついてきたのだ。

ダァンツ

「セツ！！！」

月華はすぐにセツに駆け寄り、しゃがみ込み、ギュツとセツの横たわった身体を抱き寄せた。

「セツ！セツ！セツウ……。」

月華は必死にセツの懐に手を押し当て、止血しようとしている。

しかし、そんな月華の行動も空しく、血は激しく地を張ってゆく。

「セツ……。」

月華の顔は涙でぐしゃぐしゃになっていた。セツの意識はなく、

月華の流した涙はセツの頬を伝うだけだった。

「セツ、うちの魔術で治してあげる！」

日華がセツの元へ駆け寄ろうとした。

「もう……間に合わないよ。日華……あなたはあたしが

守るから……

ウインド！」

月華はいきなりそう叫ぶと、日華を風で地球界まで吹き飛ばした。

「サンダー！！！」

魔法で岩肌を崩し、地球界への扉を塞いだ。日華はただ一人、地球界に取り残されてしまった。

「月華！何してるの！！一緒に逃げるんでしょ！！ちよっと月華

!こんなときに悪ふざけはよしてよ!!」

ドンドンッ

日華は必死に岩に拳をぶつけた。

(・・・日華。)

月華が日華の心に語り掛けてきた。

(・・・父上の書庫に入ったって言ったわよね。)

(それが?それがどうしたのよ?!そんなことより月華早く逃げないと!!)

(そのときに手に取った書物に最強と呼ばれる魔術が載ってた・・・きつとこれなら地球界との扉を完全に塞げる。)

(それって・・・身を滅ぼす魔術なんじゃ・・・。)

(そう、その魔術。)

(そんなことしなくてもこっちに来てサンダーで・・・!!)

(駄目よ・・・そんな弱い魔術じゃ・・・すぐに元通りにされて地球界への扉が開いてしまう・・・。そしたら日華が捕まっちゃう・・・。それにね、日華。)

(なに・・・?)

(魔術は地球界じゃ使えないの・・・。)

(!!)

(だからあたしがこっちの世界で塞ぐしかないの・・・)

(何言ってるの?!そんなことしたら月華・・・死んじゃう・・・ひつく・・・じゃない・・・。)

日華の眼には次第に涙が溢れてきた。

(あたしは、あたしはね、日華。あなたがいてくれるだけでとても励まされたし、元気になった。あなたがあたしを癒してくれたの?分かる?)

月華の目にも涙が溢れていた。

「ひつく・・・うえつく・・・ひいつく・・・。」

ドンッ・・・ドン・・・トン・・・

日華は俯きながら、岩を何回も叩いた。力強さが次第になくなっ

てきている。

（あなたは、あたしの闇を照らす光だから……だから……生き抜いてほしい……あたしなんかより……もっともっともおおおつと生きてほしい……。）

（！！！！！！）  
「月華？！月華あ？！月華！！嘘って……嘘って言うてよ  
おおおー！！！！！！」

ドンツ！！！！

さつきまで俯いていた日華の顔がいきなり前を向いた。岩を力強く叩いたその拳からは一筋の血が流れた。

「……メテオ。」

月華がそう唱えると隕石が次々と降ってきた。

隕石は追ってきた兵隊たちに打撃を与えた。

（日華……あたしがいなくても強く……強く生きて……  
……ね……やくそ……く……  
グシャツ

「うわああああああああああああああ……！！」

日華の悲しみと憎しみの溢れた泣き叫ぶ声が永久に続くかのよう  
に鳴り響いた。

まるで虫が潰れるような音がした。しかし、虫にしては大きすぎる音だった。

隕石は、完全に地球界への扉を塞いだ。

日華は月華からもらった紅いクリスタルを手から血が流れる程強く握って放さなかった。

そして、以心伝心しているはずの月華の心からは言葉一つ聞こえてくることは二度とはなかった……。

T  
e  
n  
e  
a  
s  
e

足掻いても足掻いても守れないもの（後書き）

今まで読んでくださった方ありがとうございました。

続編をお書き致しますので、気が向いた方は読んでいただけたらと思います。

本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8542d/>

---

Wing

2010年10月10日17時33分発行